



第	14	回
---	----	---

## 落ちた鐘の戻し方・河村瑞賢

作家 童 門 冬 二

河村瑞賢は江戸初期の大土木工事業者だ。伊勢(三重県)の人だ。少年時代から江戸に出てきた。当時の江戸は建設ブームだった。しかし工事のほとんどは大手が独占していて、突然出てきた田舎者にはとても仕事など与えられない。しかしこのころの幕府は新しい技術者の発見に努力していた。あるとき芝(東京都港区)の増上寺の鐘が落下してしまった。鐘は付近の住民にはとっては、時計の代わりでありまた危急の災害を知らせる貴重なコミュニケーションの役割を負っている。みんな困った。そこで幕府は鐘を元に戻すことを考え、その工事を入札にした。単純な入札で、

「工事費のいちばん安い者に落札させる」

というものである。

それに、増上寺の鐘は名物だったから、たくさんの江戸市民がこのことを知っていた。みんな、「鐘はどうやって戻すのだろう?」

と大きな関心を持っていた。おそらく工事を施工する日はたくさんの見物人が集まるにちがいない。したがってこの工事の入札は"チエ比べ"である。大手をはじめたくさんの工事業者がわれこそはとチエを絞って入札に参加した。瑞賢も参加した。かれはまだ二十歳そこそこだった。しかし落ちた鐘を元へ戻すには常識的な工法では、鐘楼の中に櫓を組み鐘を引き上げるという方法だ。その代わり、たくさんの労務者が必要だった。多くの工事業者の入札内容はそんなことだった。

ところが瑞賢は違った。かれは自分のやり方を幕府の役人にしか告げなかった。ただ、請負価格は最低だった。約束どおり幕府は瑞賢に落札させた。みんなびっくりした。とくに経験のある大手業者たちは顔を見あわせた。

「名も知れぬあの若僧がいったいどうやって鐘を元に戻すのだろうか?」

とささやき合った。工事施工の日、多くの見物人が集まった。専門の業者たちもやってきた。かれらは若い瑞賢がどんな方法で鐘を戻すのだろうか、とその方法に多大な興味を持ったのである。自分たちが落札できなかったことなどどうでもよかった。とにかく瑞賢のお手並み拝見ということで鐘楼のまわりはグルリとたくさん見物人でいっぱいになった。

ところがこの日工事を請負った瑞賢は、別に櫓を組みわけでもなく、またたくさんの労務者を動員するわけでもなかった。ブラリとやってきた。

大手業者たちはそんな瑞賢をみて腹を立てた。「あいつめ、手がないものだから結局は降参するにちがいない」

と思った。が、しばらく経つとワッショイワッショイという大きなかけ声がして、人の群れがやってきた。みんな肩に米俵を担いでいる。米屋たちだった。

「いったいなんで米屋がこの工事現場に用があるのだ?」

みんなそう思った。米屋たちが鐘楼の前にくると、瑞賢がいった。

「みなさん、ご苦労様です。では、工事にかかりましょう」

そういって、瑞賢は米屋たちにまず米俵を鐘楼の上の片側に、一俵ずつ並べさせた。そして鐘楼の天井にある吊り道具を使って、鐘に引っかけさせた。瑞賢が指示した。

「まず、鐘を積んだ俵の上に載せてください」

米屋たちは力を合わせてそうした。鐘は米俵の上に載った。すると瑞賢は、

「では、反対側に米俵を二俵ずつ積んでください」といった。二俵ずつ米俵が積まれると、瑞賢は鐘をその俵のほうへ移させた。それがすむと、今度はこっち側を三俵にする。鐘を移す。次は向こう側の米俵を四俵にする。鐘を移す。こういう繰り返しをはじめた。みていた連中はやっとながた気がついた。

「かれは、米俵を一俵ずつ高くしながら、鐘を移していく。米俵は最後は元の位置に戻るにちがいない」

そのとおりだった。考えてみればむずかしいことでもなんでもない。みんなが考えたとおりだった。瑞賢の指示で米屋たちは自分たちが担いできた米俵を、こっち側そして反対側と順に一段ずつ高く積んでいった。吊られた鐘はそのたびに高い場所に移っていく。

監督にきた幕府の役人もいまはようやく瑞賢の意図がわかってニコニコ笑った。そして、

「河村、うまいことを考えたな」と褒めた。瑞賢は恐縮したがこんなことをいった。

「下に落ちこちて鐘もケガをしているでしょうから、傷をいたわっているんですよ。これなら、鐘も痛くないでしょうから」

役人は黙って瑞賢の顔をみた。そして、

「おまえは面白い男だな」としみじみ瑞賢の顔を眺めた。胸の中では感心していた。そして、(この男をこれからも幕府の工事に使おう)

と思っていた。鐘は元に戻った。これで解散かと思うとそうではなかった。瑞賢が米屋たちに向かった。

「みなさん、きょうはご苦労様でした。お陰で鐘は元に戻りました。そこでお願ひがあります」

「なんだね」

米屋のひとりがきいた。瑞賢はいった。

「使った米は、わたくしの予算で買取らせていただきましたが、こんなにたくさんあってもわたくしにはどうしようもありません。六掛けで引き取ってもらえますか？」

「なんだって！」米屋たちはびっくりした。しかし瑞賢の言葉の意味がわかるとみんな笑い出した。瑞賢がこの日使った予算は、米の代金と米屋たちに対する労賃だけだった。だから安上がりだったのである。専門の工事人はひとりもいない。しかも瑞賢は、一旦買取った米を六掛け(六十パーセント)で引き取って欲しいという。これは米屋にとってもうまい話だ。一旦瑞賢に売った米を四十パーセント引きで引き取り、改めて適正価格で売ることができるからである。瑞賢のチエに米屋たちは感心したが、もっと別な意味で感心した人物がいた。工事監督の幕府の役人だった。役人は胸の中でニヤリと笑った。そして、(河村という男はまったく頭がいい。米屋に六掛けで売る代金は、全部河村のものになる)

とほくそ笑んだ。これが機縁となって、その後河村瑞賢は幕府の大規模な工事にどんどん参入していく。日本の大きな川の工事や、箱根の御料林からの材木の切り出しや、日光東照宮の修築なども引き受ける。そのたびに立派な仕事をし幕府の信用をいよいよ固くした。

「カネがなければチエを出せ」

という言葉があるが、河村瑞賢はまさしくその実行者であった。